

第2章 フィンランドの教育行政について



モニターを使った少人数授業風景。ユヴァスキュラ大学附属小学校

フィンランドの教育で最も重要なことは「教育の平等が最優先である」
フィンランド教育の根幹となっている。

フィンランド共和国 Republic of Finland の概要



1. 面積 33.8 万平方キロメートル（日本よりやや小）
2. 人口 約 533 万人（2008 年）
3. 首都 ヘルシンキ（約 58 万人、2009 年）
4. 言語 フィンランド語、スウェーデン語（全人口の 5.5%）
5. 宗教 福音ルーテル教（国教）、フィンランド正教

経済状況

1. 主要産業 金属機器、電子電気機器製造（携帯電話等）、紙・パルプ等木材関連
2. 主要貿易品目
 - (1) 輸出 電子機器、紙製品、石油類、自動車
 - (2) 輸入 原油、自動車、石油類、通信機器、医薬品
3. 主要貿易相手国
 - (1) 輸出 露、スウェーデン、独、米、英
 - (2) 輸入 露、独、スウェーデン、中国、蘭（2008 年ユーロスタット）
4. 通貨 ユーロ 外務省HPより¹

¹ 外務省 HP <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/finland/index.html> 2010.5.10

ユヴァスキュラ市



「中部フィンランドの湖水地方に位置するユヴァスキュラ市は、1837年に創立された。ビジネス、教育、スポーツ、そして文化といった分野で国内の中心的な役割を担い、8万人以上の住民が住む活気ある街である。ユヴァスキュラ市と周辺9つの市町村を含んだユヴァスキュラ地域には、16万人以上の人々が暮らしている。

毎年39,000人もの学生を抱えるユヴァスキュラは教育の街として知られ、あらゆる年齢層向けの教育が用意されている。総合大学のユヴァスキュラ大学とユヴァスキュラ高等職業専門学校は毎年多くの外国人留学生を受け入れ、国内屈指の研究・教育機関としての地位を築いている。

ユヴァスキュラは、フィンランドで最も急成長を遂げる都市のひとつで、とくに製紙、製紙機械、エネルギー技術、環境、IT、そしてウェルネステクノロジーといったビジネス分野に強みがある²。」

フィンランドの教育～底上げ教育がPISA³の成果～

2月2日火曜日。ヘルシンキは朝8時だというのに、外は夜が明けない真っ暗な状態であった。そんな中、私たち一行を乗せた小型バスは、ユヴァスキュラに向けて出発した。前夜遅く9時過ぎにヘルシンキ空港に着いたときは、雪が冷たい風と共に殴りつけるように降っていたが、ホテル出発時は静かな銀世界が広がっていた。

ヘルシンキからユヴァスキュラ大学まではおよそ280キロメートルの距離であり、およそ4時間半から5時間かかるとのことで、私たちはバス車内で通訳のヒルトネン久美子さんからフィンランドの生活や教育事情についての話を聞きながら、これから訪ねるユヴァスキュラの街へと思いを馳せた。

² City of jyvaskyla <http://www.jyvaskyla.fi/lang/japan>

³ 文部科学省 HP PISA(Programme for International Student Assessment)とは OECD 諸国が共同して国際的に開発した15歳児を対象とする学習到達度調査。読解力、数学的リテラシーの主要3分野を調査。

教育研究所訪問

午後1時、真っ白な雪景色の中、赤レンガ造りの校舎が点在するユヴァスキュラ大学に到着した。広い敷地で、一瞬どこからどこまでが大学なのか分からない、一つの街になっているような錯覚を起こしたほどである。

国際渉外担当 Ms. Elisa Heimovaara と面会し、ホールのある比較的新しいと思われる建物の中の学生たちが集うカフェで、温かなコーヒーを飲みながら説明に耳を傾けた。

まず一日目は「PISA について」専門に研究している施設を訪れ、その研究内容について説明を受けること、その後はこのユヴァスキュラ大学の学長との面談を用意してくださっているとのことであった。

私たちがそのような説明を受けている間、カフェにはコーヒーを買うために列をなしている学生やテーブルで仲間と談笑している学生が数多くいたのだが、皆話し声が静かで落ち着いている。そう言えば Ms. Elisa Heimovaara の話し声も、私たちのテーブルにいる人間にだけ伝わるようなもの静かな響きであった。日本だったら声高な話し声や、周りを考えもしない子供じみた大きな笑いの渦で騒音の中になりがちだが、外の静かな雪景色とじっくりマッチした落ち着いた雰囲気漂っている。これが大学のあるべき姿、これが大人が学ぶ世界、これが本当の学びの場なのだ、と妙なカルチャーショックを覚えると共に、フィンランドという国の教育レベルの高さや、民度のほどを感じた。

Ms. Elisa Heimovaara に案内されて、大学敷地内にある教育研究所に向かった。外は小雪が舞い散り、もちろん道路は降り積もった雪におおわれているのだが、途中すれ違う、大学敷地内を行き交う学生たちは殆どが自転車で移動しているのには驚いた。止まっていた自転車のタイヤを見るとスノータイヤが多く、また道路の真ん中には滑り止めの真っ黒な小石がばら撒かれてあった。この小石は雪が溶けたら回収して、また再利用するとのことだ。研究所のある棟には2時に到着した。



自転車通学する学生達

今回の私たちの視察目的である「フィンランドにおける PISA の考え方」について、所長 Dr. Jouni Vailijarvi より「The Finnish Education System」を中心にレクチャーを受けた。義務教育は9年間の一貫教育で、日本と同じ6・3制を敷いている。日本との大きな違いは、小学校1年生に就学する前にプレスクールと呼ばれる(フィンランド語では Esikoulu) 就学前教育が行われることである。

筆者が以前スウェーデンの教育を視察した際も、やはりプレスクールといった就学前教育が行われており、この後訪れたデンマークでも同様であった。北欧諸国では就学前教育が一般的に行われているようだ。日本では小1プロブレムが社会現象となり大きな話題となっているが、それも就学前教育をしっかりとシステム化することによって解消されるのではないかと、興味深く思いながら話に耳を傾けた。

このプレスクールは、小学校内に設けられた施設や保育所にて無償で行われるとのことで、学校だけと限定していないところに教育形態の柔軟さを感じた。

もうひとつ感じた柔軟さは、就学猶予についてである。プレスクールに通わせてみて、もし自分の子どもが小学校生活に馴染むためには不安や心配を親が感じた場合、就学猶予を申請すれば認められるということである。子ども自身も、その猶予によって遅れの意識を持ったり、また周りの子どもから差別視されたりすることもなく、一人ひとりの子どもの能力や状態によって教育が行われているということである。

またフィンランドでは学費は大学まで無償で、教科書だけではなくノートや鉛筆といった文具類から給食費までも無償とのことで、教育にかける国の力の入れ方の大きさも改めて強く感じた。

子どもたちは中学校を卒業すると、「普通科高校か職業訓練校に進み、その後は大学に進学するか技術専門学校に進むということである。中学卒業者が進学する人数の割合は、普通科高校が6割弱、職業学校が4割弱ということである⁴。」子どもたち自らが自分の希望や実力に合わせて普通科か職業校かを選択することは当たり前のことであって、早くから自立を目指しているという。手に職をつけて仕事に就きたい子はそれなりの道を選び、自分の目的にかなった職業学校に進むという。

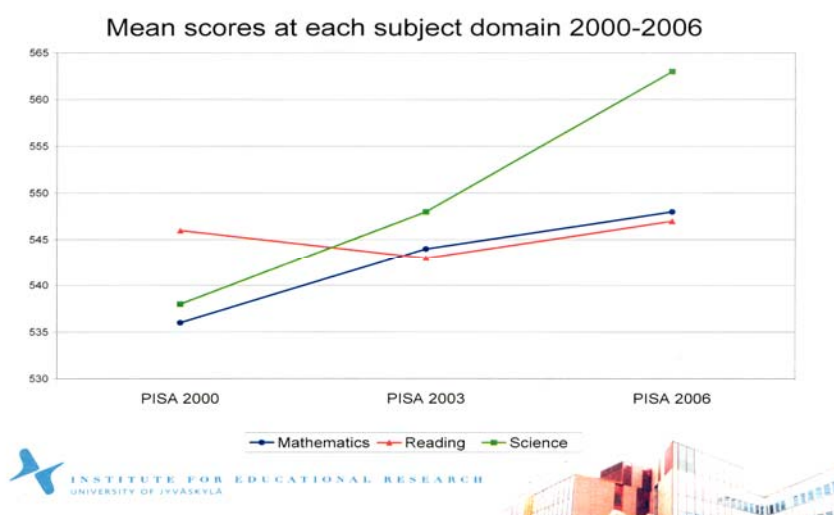
東京の子どもたちの中には、中学を卒業したらそのまま普通科高校へと進み、将来設計を意識せずに大学進学を目指す子もいる。早いうちから自分の人生を考えさせ、自立への道を模索することが当然となるような教育を、東京都の教育制度に採り入れたいものと思った。

⁴ 増田ユリア 2008 「教育立国フィンランド流教師の育て方」岩崎書店 p.12

なぜPISAで優秀なのか

次に最大の関心事である PISA について、これまで研究されてきた内容を統計を基に説明していただいた。

図 1



2006 年の世界各国の結果を表したグラフをもとにフィンランドの抜きん出た位置と共に、他国や日本の位置を確認したのち、フィンランドにおける PISA の分析と検証について説明を受けた。図 1 で見るように、数学と読解、科学リテラシーそれぞれの 2000 年、2003 年、2006 年の経年変化の推移から、科学リテラシーが急に伸びていることが確認できる。

説明によると、これは 90 年代にこれまでのカリキュラムを変更し、理系に力を入れることによって表れた成果だそうである。そしてそのためには教員の教育へも大きな力を注ぎ、まずは解り易い授業の研究を教員たちが進めるようなシステムを作ったという。アジア等の他諸国に比べ、生活の中でどう使われるか、実験、体験によるメソッドの研究が多くなされ、力点を置いているとのことである。

また、大変興味深く聴いた話に、性差による PISA の結果の違いが見られるということがある。これは国によっても異なるが、フィンランドの場合は、読解力と科学リテラシーにおいては女子のほうが優位にあり、数学は男子が優位にあるとのこと。

日本の場合をみると、数学と科学リテラシーは男子が優位にあり、読解力では女子



教育研究所でレクチャーを受ける

が優位にあることが分かったが、幼時期から女子の方が言葉の習得が早いことから頷ける点でもある。

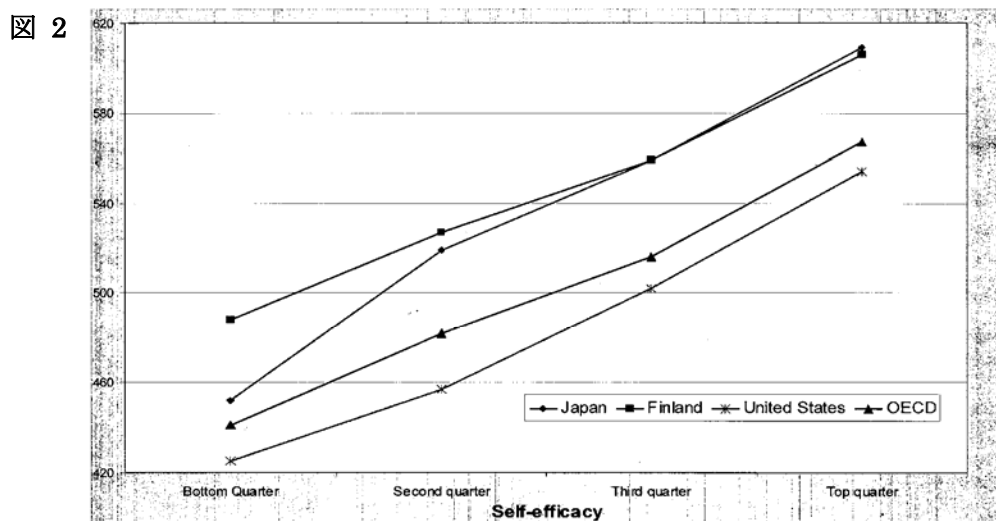
フィンランドの場合、「義務教育では男女の比率は半々だが、高校になると女子が6割を占め、大学でも女子の方が男子より多くなるという⁵。」女子の方がコツコツと真面目に学習に臨む姿勢がみられ進学率が高いということや、教員志望者が女子に多いといった説明からも理解できる事柄である。

また、この国の「女の子はとにかく本をたくさん読むという。もともとフィンランド人は老若男女問わず読書好きで、図書館の利用率は世界一といわれる。フィンランド人の80パーセントが図書館に足を運び、年平均12回図書館で本を借り、1年に借りる本は1人あたり20冊である（2005年教育省発表）。小学生の22パーセントが毎日1時間以上読書をする⁶」ということである。子どもたちには読み聞かせもさかんに行われ、子どもが寝る前に本を読んであげる親が多いということからも、この国の人たちが読書好きになることや学力の高さは頷ける。

読解力に関しては、世界的にも女子が男子より抜きん出て優位さが際立っていることや、数学においては男子が優位さを示していることから、国によつての違いこそあれ、おおた女子のほうが読書や語学に興味を示す度合いが高く、男子が数字に強い傾向にあることが結果として表れているようである。

これらの説明を聴きいろいろな質問をしていく中で、更にフィンランドの教育について、PISAでの優秀な結果を示すに至った理由を知るようになった。

その結果を示すのが、次の図2である。



INSTITUTE FOR EDUCATIONAL RESEARCH
UNIVERSITY OF JYVÄSKYLÄ



⁵ 堀内都喜子 2008「フィンランド 豊かさのメソッド」集英社新書 p.72

⁶ 前掲書 p.73

これは、フィンランドとアメリカ合衆国と日本、そして OECD 諸国の平均とを比較したものであるが、得点の分布を見るとフィンランドは Bottom Quarter が 490 点近くで、日本は 450 点、OECD は 440 点、合衆国は 425 点ぐらいである。それに引き替え Top Quarter はフィンランドと日本は 610 点ほどで、日本のほうが上位にある。OECD は 570 点、合衆国はほぼ 555 点ぐらいに位置する。

つまり、フィンランドは上位と下位の点数の開きが小さい。すなわち下位の点数が OECD の下位から 2 番目のグループより高く、合衆国の下位から 3 番目(上位より 2 番目)のグループに近い位置にあるということである。

Dr. Jouni Vailijarvi によると、フィンランドの教育は全体の学力の底上げを図ることに力を注いでいるとのことだった。「どの子にもわかる、できる授業」にするために、教員の質の更なる向上をも図っているとのことである。

以上から、フィンランドがなぜ PISA で優秀な成績を収めているのか、その理由に大いに頷けた。子どもたちの学習の理解度を上げることによって「できない、わからない子」が減少すれば、特にトップクラスの子どもの増やさなくても全体の学力はボトムアップするわけである。そして何よりも、勉強がわかるようになれば子ども自身の学習に対する抵抗感が無くなり、むしろ学習意欲は増進する。相乗効果が現れることでますます学力が上がるといった図になるわけである。

東京都の教育の中にもこうした教育システムを構築することによって、是非ともフィンランドのように「できる、わかる授業」から PISA での優秀な結果に繋げていきたいものである。

ユヴァスキュラ大学学長の話

教育研究所でフィンランドにおける教育の一端を伺った後、次はユヴァスキュラ大学学長室を訪問し、学長の見解を伺った。

学長室のある建物棟までは歩いて 7、8 分だったが、午前中に比べて降雪が多くなり、行き交う学生達もさすがに自転車を引きながら歩いていた。頬を打つ雪も風も冷たく、北の国で学ぶ学生達の忍耐強さを感じさせられた。



学長の Dr. Aino Sallinen と

学長室に案内され、歴代の学長らの写真の飾られている大きなテーブルのある部屋へ通され待つこと 5 分ほどすると、学長の Dr. Aino Sallinen がニコニコとした中にも風格を感じさせる笑みでお出でになった。

ユヴァスキュラ大学について、質疑応答も含め、伺った内容を以下に列挙する。

- ・ 先生という職業はフィンランドではステータスが高く、ポピュラーであり人気が高く、社会で認められている。
- ・ フィンランドは小さな国であり、人口は530万人に過ぎない。テクノロジーが発達した国で、ノキアは国際競争力でも高い地位にある。
- ・ 少ない人口なので教育の立場を重要視して人に投資をしてきた国であるからこそ、1人も落とすことが出来ない。
- ・ こうしたはっきりした目標があるので、特別な教育が大事であり、国民的な教育意識が高く、研究も続けていく。
- ・ 学生は教員トレーニングをしっかりと受け修士課程を修了し、自分で研究をしていく。常に状況に対応できる、自分で学んでいける探求心があり、ハイクオリティーが身につく。
- ・ 最近では教師に対する尊敬の念が薄れていることに問題が見えてきている。尊敬の念が足りなくなっていることはグローバル化した問題である。
- ・ 人は学べば学ぶほど高い生活に近づくことが出来る。フィンランドには文化的な背景があり、国民性として生真面目であり、仕事をするために学ぶ必要があることを国民が理解している。
- ・ 子ども達も、学んでいくための能力をつけるために助けてくれるのが先生と理解している。
- ・ この大学には、選びぬかれた優秀な学生が集まり、海外からの留学生も多い。
- ・ 優秀な女子生徒は Best Teacher になっている。
- ・ 今後の問題としては、成績優秀でなくても、いろいろな問題や経験を持った人を先生にするという考え方も出てきている。
- ・ 数年前から入試のシステムが変わってきた。他の国でもそうだが、男性教諭の採用を増やすためにどのように募るかといったことが問題となっている。
- ・ 教育にとって一番大事なのは、相互関係の中で学び続けること。一人の人間として社会の中で役立っていける人間を作ることである。

学長 Dr. Aino Sallinen の教育にかける熱い思いは、その静かにたたみかけるような話しぶりからも窺い知ることができた。教育は人づくりであること、すなわち国づくりであることの重要さを秘めていることを改めて強く実感させられた。

外に出るともう辺りはすっかり暗くなり始めていた。あちこちに点在する灯りは蛍光灯の強い光ではなく、柔らかな暖かさを感じさせる白色灯であることに、子どもの頃に開いた絵本の中の1ページを見る思いがした。

自由形態の学校（ネナミエニ保育園・小学校（1、2学年））

ユヴァスキュラ大学を出てバスで30分もすると、雪にすっぽり覆われた景色の中に小さな建物が見えた。バスを降り、雪の中をスポスポと歩き雪を被った遊具がある園庭（校庭）を通り過ぎるとネナミエニ保育園・小学校の入り口に到着した。入り口では Mrs. UllaMursula 校長先生と、保護者の会の代表の女性が私たち一行を温かい笑顔で迎えて下さった。



ランチルームで校長先生、保護者代表と懇談

窓際に真っ白な切り紙細工の鳥の飾りが吊された明るいランチルームに通され、手作りのベリージュースを頂きながら和やかな雰囲気ですべてが始まりました。

紹介されるまでは、保護者かと思ふほどラフな服装と無造作に垂らした長い髪の女性の校長先生で、保護者代表の方共々にこやかにいろいろなお話をして下さった。このネナミエニ保育園・小学校は、保育園には60名の子ども達、小学校には1年生が15名ずつの2クラスと2年生30名の1クラスがある。

このネナミエニ保育園・小学校は、保育園には60名の子ども達、小学校には1年生が15名ずつの2クラスと2年生30名の1クラスがある。保育園では、0～3歳未満、3～6歳の2グループにクラスが分かれ、6歳児になると1日4時間、保育園内にあるプレスクールに通い、その後は保育園で過ごす。

保育園の1日の始まりは午前7時で夕方5時までの保育となる。保育料は月額233ユーロ（29,125円）の負担だが、プレスクールは無償なのでその分は差し引かれる。また、食事は朝とお昼の2食が供される。

小学校の授業は午前8時か9時から（季節によって異なる。）始まり、午後2時に終わり、児童達はその後クラブ活動（日本の学童クラブに当たるもの）で午後5時まで学校にいらることができる。このクラブ活動は有料で、月額70ユーロ（5,750円）である。

小学校とプレスクール合同では、年に1回スケートに行ったり、春にはバスハイクをしたり、保護者主催のお祭りに参加したりといった、子どもたちと保護者、先生との交流を図ることを目的とした行事を行っている。

また、PTAは保育園と小学校で一緒に活動し、代表の任期は1年で積極的にバザーなどにて集金活動を行い、これによって活動の運営資金に充てている。

教員の数は4名（クラス担任3名、特別支援1名）で、そのうち1名が男性教諭で、他にアシスタント2名が協力体制のもと働いている。

このあと、施設内を案内していただき見て回った。小規模な保育園・小学校なので平屋建てでこじんまりとしているが、保育園などは園児の休む部屋にロフトのように中2階が作られており、子ども達は喜んで上がり下りして楽しんでいるとのこと。また、手作りの掲示物は愛らしく、ぬいぐるみの人形があちこちに置いてあり、そこかしこに温かな家庭的雰囲気が溢れていた。



温かさに溢れた教室環境

小学校の教室のほうも、子ども達がいつでも好きなときに休めるようソファが置いてあったり、広さも机の配置にゆとりがあったりして、明るい雰囲気が感じられた。こうした教室環境は子どもたちの気持ちを安定させる上で非常に重要で、東京の公立小学校にもこのようなゆとりや明るい教室環境が望まれる。校長先生の力量が、その学校経営に反映してくるのはもちろんのこと、保護者代表の方の話によると、今の校長先生になってから授業を週のうち 20 時間担当して下さったり、イベントを催して下さったりしたお蔭で保護者の協力が大きくなったそうだ。

2 時間ほどの訪問を終えようと別れを告げるとき、保護者代表の方は、これから町の社会人講座に学びに行かれるとのこと。もう 6 時半近いのに、これから？と、勉強熱心な姿に驚くと共に、子どもの教育に熱心であることは自身の向学心に基づいていることも併せてあることを感じた。

ユヴァスキュラ大学付属学校訪問

2 月 3 日水曜日、朝 8 時 45 分にユヴァスキュラ大学に到着し、国際渉外担当 Ms. Elisa Heimovaara と面会。本日の予定を確認し、午前中はユヴァスキュラ大学付属学校(小学校、中学高校一貫校)を訪問した。

小学校はちょうど子ども達の登校時間のようで、たくさん子ども達があちこちから集まってきていた。雪に覆われている景色の中、遠くのグラウンドでは、たくさん男の子達がホッケーに興じている様子が見られた。さすが北欧国である。



案内をしてくれた 6 年生

小学校の入り口を入ると、校長先生が迎えて下さり挨拶の後、案内役をしてくれる 6 年生の女の子 2 人を紹介された。1 人の女の子は日本

人で、7年前に家族でフィンランドにやってきたという石山桜子ちゃんという子だった。こうした学校側の配慮に温かさを感じ感謝の念を抱きながら、図書館を始め体育館や、桜子ちゃんのクラスの図工の授業などを見学させていただいた。

10時ごろに小学校を後にして、中学・高校のある校舎へと移動した。10分ぐらい歩いたところに中学校と高校があった。副学長の Mr. Heikki Parkatti が出迎えて下さり、中学校と高校の教育について説明して下さった。

- ・ この学校は教育学部の実習校であり、体育の専攻科があるのはここユヴァスキュラ大学だけである。
- ・ 1994年から今のようなコース選択制となり、生徒は自分の好きなように6年間で単位を習得することになっている。
- ・ この国では、医学部や教育学部担任コースが一番難しい。人気がある大学は特に競争率が高く難しい。

この後、Heikki 副学長が校内を隈無く案内して下さいました。興味深かったのは、教室内の生徒が授業を受けている様子を上階から見るができる（天井がガラス張り）ようになっていたことだ。また、教室の廊下側はマジックミラーになっており、教室に入らなくても一目で分かるようにことには、これで生徒たちから苦情が出ないのかと思ったが、授業を邪魔せずに外から参観できることも或る意味では良い方法だと思った。



充実した工具の作業教室

また驚いたのは、技術工作教室の設備の素晴らしさである。どこかの工場と見紛うほどに工具が大きな机の側に備え付けられ、天井からもあらゆる工具がぶら下がっている。

更に驚いたのは、生徒達が休み時間に身体を鍛えられるようにジムが備えられており、側にはサウナ（写真 p. 87）もあったことである。Heikki 副学長曰く、「身体が健康でなければ（鍛えなければ）勉強も身につかない」とのこと。



カウンセリング・ルームで相談する生徒

次に、学生のような相談を受け持つ相談室・カウンセリング・ルームを訪れたとき、ちょうど1人の女子高校生が相談に来た。選択した授業を重ねて取ってしまったため、他の授業をうまく組めなくてどうにもならなくなってしまったといった相談だった。女子生徒は、困惑してギリギリといった表情でいた。さっそく担当の先生が目の前のパソコンに生徒の時間割表を映し出し、それを見ながらアドバイスをしていた。

パソコンの画面を見つめ、アドバイス通りに時間割表が変更されると、生徒はニコニコと安心した様子で部屋を出て行った。

このパソコンには、全ての生徒の時間割表（単位取得）が入力されていて、いつでも生徒がスムーズに授業を受けられるよう、単位を取得できるように支援しているということだった。実際に学校全体の時間割表を見せてもらったが、細かく授業が配置されていて、先ほどの生徒ではないが自分が取りたい授業と取らなければならない授業との見極めもしなければならず、初めての生徒にはこのような相談システムはかなり重要であると思った。また、ここでは進路指導的な相談にも対応されるとのことである。

生徒の自主自立を促すための、こうした配慮の行き届いた支援システムは絶対に必要不可欠であり、それをきちんと実践しているこの学校の方法を東京都の教育システムにも組み込んでいけたら、と望みを抱いた。

昼食は、大学食堂で取ることになった。食堂は日本のそれと変わらない雰囲気、たくさんのお客でごった返していた。違いと言えば、学生達が紳士淑女的で、階段ですれ違ったりトイレで並んで待っていたりしてもニコニコとドアを押さえてくれたりと親切でフレンドリーな感じがした。また、騒々しい感じは全くなく、ひと言で言えば、学生は社会性を有した大人であるということに妙に感心してしまった。これも、我が国として見習わなければならない教育のひとつであろうと思った。

徹底した教員養成

昼食後は大学の教育学部の一室で、前日私たちが到着してからずっとこのユヴァスキュラ大学の案内をして下さった Ms. Elisa Heimovaara より「Finnish System of Education and Teacher Education」についてレクチャーを受けた。以下、プレゼンテーションされた際のテキスト「Education in Finland」から一部を掲載する。和訳すると意味合いが異なる場合があるので、原文のまま載せる。

History of the University of Jyvaskyla

- ▽ 1863 Teacher Training College
- ▽ 1912 Summer University , Scientific Library
- ▽ 1918 University Society
- ▽ 1934 University College of Education
- ▽ 1963 Physical Education
- ▽ 1966 University

Early Childhood Education and Care

- ▽ In kindergartens or family day care
- ▽ Day care & early childhood education
- ▽ Base on a curriculum → children are not actually ‘taught’
- ▽ Domain of Ministry of Social Affairs and Health
- ▽ Not free of charge; costs 18 - 250 C/month
- ▽ About 400000 children under 7 in Finland, about 50% use day care services

Pre-School Education

- ▽ Voluntary, free of charge
- ▽ Most children (ca. 97%) attend
- ▽ 6-year-olds
- ▽ About 4 hours a day
- ▽ Either in schools or kindergartens
- ▽ Not school - no actual teaching
- ▽ Curriculum based
- ▽ Latest researches show very positive results on learning e.g. numbers, letters, etc.

Basic Education

- ▽ Grades 1— 9 -primary 1-6 -lower secondary 7-9
- ▽ Ages 7 - 16
- ▽ Compulsory
- ▽ Free of charge
- ▽ About 99.7% of the age group complete
- ▽ Primary School (grades 1-6) -teaching carried out mostly by primary teachers, ‘class teachers’
- ▽ Some subjects taught by subject teachers, e.g. languages, music, crafts, PE
- ▽ Lower secondary school (grades 7-9)
-teaching carried out by subject teachers, i. e. different teacher for each

subject

Secondary Education

- ▽ Upper Secondary School, 'high school'
 - 2 — 4 years
 - matriculation examination
- ▽ Vocational Education
 - vocational institutes
 - 3 years, 120 credits
 - apprenticeship training
- ▽ Possible to combine; in Jyväskylä about 500 students doing the so-called 'double degree' i.e. vocational qualification + matriculation examination

Higher Education

- ▽ Universities
 - Master' s degrees, PhD
 - research
- ▽ Universities of Applied Sciences, 'polytechnics'
 - Bachelor' s degrees (+ Master' s)
 - more pragmatic, e.g. nurses, engineers, occupational therapists, etc

Education Policy in Finland

- *Equality of education has a high priority*
- Education for all
 - 140-year-old tradition
 - Comprehensive school 1970
 - Well-educated parents → promotes motivation for life-long and life-wide learning
 - Social and regional equality

Teacher Education in Finland

- ▽ Teacher' s profession has a high status
- ▽ Popular fields of study → high graduation level of enrolled teacher students (ca 6000 applicants for primary teacher education in 2007)
- ▽ Master degree necessary also for primary level teachers
- ▽ Integration of theory and practice (Teacher Training school)
- ▽ Pedagogical knowledge and subject knowledge integrated
- ▽ Teachers are life-long learners

- ▽ Teacher education is research-based
- Primary School Teacher
- Bachelor' s (180 ECTS) and Master' s Degree(120 ECTS) 数字は単位数
- ▽ Language and Communication Studies 25
- ▽ Basic Studies in Education 25
- ▽ Intermediate Studies in Education 35 (Including 10 ECTS credits Teaching Practice)
- ▽ Advanced Studies in Education and Master' s Thesis in Education 80 (Including 16 ECTS credits Teaching Practice)
- ▽ Multidisciplinary School Subject Studies 60
- ▽ Minor Subject Studies 60
- ▽ Optional Courses 15
- ▽ Total 300 ECTS credits

就学前教育に関しては、北欧では一般的な教育システムになっており、設置は小学校内や保育園内であったりしているが基となるカリキュラムは設定されている。小学校という学びの場に慣れさせることが目的であり、そこでの評価はないということである。

また、フィンランドの教育で最も重要なことが、「教育の平等が最優先である」ということである。このことがフィンランドの教育の根幹となっている。であるからして、インクルーシブ教育⁷は障がいのある子もない子も、移民の子をも含めて全ての子どもに対して当然の如くに行われているのである。

この国では、教師という職業が高い地位を持ち、非常に人気の高い職業である。

それだけに教師への教育には力を入れている。教員の質の向上が、このフィンランドという国の教育すべてにかかっているという。優秀な生徒が教員養成大学に入学し、教育の方法論から実習に至るまで厳しい評価を通して、それから学校という現場に出て行っていることに、国策としての力の入れ方をみた。

フィンランドでは「専門は何であれ、教職課程を受けていなければ正規の教師にはなれない。日本のような自治体の教員採用試験はない。大学で教育課程を修了していれば、教員の資格ありとみなされ、地域は関係なく自由に就職ができる。しかしその分、その教職課程を受講するためには厳しい審査を通過しなければならない。それは、小学校の教師だけではなく、中学・高校の科目の教師を目指す人にとっても同じことである。知識だけではなく、教師にふさわしいかどうか、人間性を判断する適性検査が行われ、そ

⁷ インクルーシブ教育とは障がいのある子もない子も共に育つ教育のあり方のこと。

1994年にユネスコで採択されたサマランカ宣言に、「統合教育」を原則とし、「就学には本人、保護者の意思を尊重すること」や「教育環境の整備に最大限努力すること」とされている。

れに受かった者だけが教職課程を受講できる⁸。」

このようなフィンランドの教育行政の厳しさに引き替え、日本の教育行政はまだまだ甘いのかも知れない。大学での修士課程修了が原則であることや、教育実習も厳しい審査を経たうえで、かつ1年次から実施される点など、教員養成の根本のところから見直す必要があるように思える。教育を考える大前提に教員養成の重要さがあることを、今回の視察では十分に会得できた。

どこに住んでも同じ教育

充実したユヴァスキュラでの2日間の日程を終え、一同ヘルシンキに夜7時過ぎに戻った。そしてホテルに着くとそのままホテル内のレストランに直行して、今度はこの日の最後の日程である国会議員 Mr. Tuomo Hanninen とヘルシンキ市議会議員 Ms. Kristiina Kokko との懇談を行った。

議員としての立場からの教育観やフィンランドの教育に関して、行政の役目等も含めてお話を伺った。



国会議員 Mr. Tuomo Hanninen と
ヘルシンキ市議会議員 Ms. Kristiina Kokko と

国会議員 Mr. Tuomo Hanninen とヘルシンキ市議会議員 Ms. Kristiina Kokko とおおよそ1時間半あまりの懇談ではあったが、この国の教育のあり方について改めて再確認することとなった。

「首都ヘルシンキであっても、北のツンドラ地帯であっても、フィンランドではどの学校においても同じ教育がなされています。」と、力強く私たちの質問に答えてくださった、国会議員の Mr. Tuomo Hanninen の自信に満ち満ちた顔が忘れられない。

子ども一人ひとりのニーズに応じた教育

2月4日木曜日。朝の8時というのに外は暗く、夜の帳が下りたような中をバスに乗り込み、私たち一行はヘルシンキから車で20分ほどのビシュッテ市にあるクオッパヌンミ総合学校に向かった。

ビシュッテ市は、人口8万8000人で、年に2パーセントも人口増の急成長を遂げているこれからの発展が望まれる町とのことだ。

まず玄関ホールで迎えて下さったのが Ms. Pirjo Levaniemi 教諭で、通訳のヒルトネン久美子さんとも友人関係にあるとのこと、とてもスムーズな案内をしていただいた。

⁸ 堀内都喜子 2008「フィンランド 豊かさのメソッド」集英社新書 p.60

先生のクラスに行くと、1人の小学3年生の男の子が勉強をしていた。先生は国語の先生なので、特別に躓きのあるこの男の子を自分の教室に呼んで指導をされていたところらしい。先生の受け持ちのクラスは6年生で、彼らはその時間は他の授業で教室を空けていた。男の子がプリントをひとつ片付けると Ms. Pirjo Levaniemi 教諭に終わったことを告げ、教室を出ていこうとした。すると先生はまだ学習が十分でないことを述べ、新たな課題を与えていた。

たった一人の生徒ではあるけれど、この子が分からないできない課題については徹底して教え、理解に導くということは、全体の中でのくぼみをなくすことであるから大切な時間であり、先生も生徒もその点を良く理解しているとのことだ。学習に躓いた生徒をこのように特別にフォローしている点が、子ども達全体の学習能力を底上げし、これがまさに PISA の優秀なる結果を導いている点であることに大いに頷けた。

また、この例だけではなく、ある教室ではスペイン語を学習している中学生3名に、先生とアシスタントがついて授業を行っていた。3名？と思いきや、ここもまたスペイン語習得に躓いている生徒たちへの特別支援が行われているのであった。

フィンランドでは国語以外の外国語の習得にも初等教育から力を入れているとのことである。日本では英語教育がやっと小学校で導入されるが、グローバル化された現代では語学教育においてはかなり他国から遅れている感を覚えた。

ここでハタと気がつき Ms. Pirjo Levaniemi 教諭に質問したところ、フィンランドの教育の中では、特別支援教育というのは日本のように障がいのある子ども達だけを対象としているのではなく、学習に躓いたり、自分の力だけでは習得が困難な子ども・生徒達を支援するものを言っていることがわかった。考えてみれば誠にその通りで、フィンランドの教育の豊かさにまたひとつ感じ入った。

特別支援教育を要する障がいのある子どもたちの学習する教室を覗いてみたが、そこでは児童8名に対して担任の先生以外にアシスタントの大人が3名もついていた。子どもたち一人ひとりへの手厚い支援がされている様子がみられた。

また、軽度の発達障がいと思われる児童（3年生ぐらい）3名が1人の先生と学習している教室もあった。平常は自分のクラスで他の子ども達と一緒に授業を受け、必要がある授業だけ特別教室で授業を受けることができるそうだ。その子その子のニーズに応じた指導が受けられるようなシステムが構築されていることに、これこそインクルーシブ教育と、その現実を目の当たりにして感激する思いであった。



個別に応じた指導の様子

必要とする子どもたちに必要な支援をすることが特別支援教育であることの実体を、この目で実際に見たことを、これからの東京の特別支援教育に生かしていきたいと強く感じた。

見学途中で、校長先生である Mr.Markku Tolvanen と面談をした。校長先生はこの学校に来てまだ3年目ということだが、学級担任を経験した後、特別支援教育の担任も経験され、その後に校長となったとのこと。そうした豊かな経験のせいか、尊大な感じはなく、深く優しい笑みが印象的であった。

その後、中学生女子が家庭科室で学習している様子を見た。教室入り口寄りの作業機のいくつかでは生徒6、7名が、模造紙半分ほどの紙に自分の住みたい家の設計図を作成していた。部屋の見取り図のようなものだが、テーブルからカーテンに至るまでテキストスタイルの見本（広告紙から切り取ったもの）が添付されていて、見てすぐ判る興味深いものだった。



自主的な活動に重きをおいた家庭科授業風景

教室の奥の方では、やはり6、7名の生徒達が先生にアドバイスを受けながら、来週行われるという学内のお祭り用のクッキーやパンを作っていた。

他にもいくつかの教室の授業風景を見学させていただいたが、一番驚き感心したことは、授業中の私語が無いことだ。児童、生徒一人ひとりが自分のやるべき学習に集中して取り組んでいた。

ゆえに、教室内は落ち着いた雰囲気、先生の話し方も静かで、決して大声など張り上げていなかった。これは日本の教育現場でも見習いたいことのひとつである。子どもは大人の真似をして大人になっていく。先生が大声を張り上げていれば、子どももそうした話し声になる。やはり先生である教師のあるべき姿を見つめ直すことも肝要ではないだろうか。

また、学習形態は一律ではなく、低学年のある教室では、サイエンスの授業で、床に寝転んだり、座りこんだりして、スケッチを行っており、子どもたちは自分の作業に熱心に集中していた。学習と言うと、机に向かってやらなければいけないような錯覚を持ちがちだが、低学年のころは特に同じ姿勢を保って学習への集中を持続させることが難しいので、いろいろな形態を考えていくことが大事である。

ここで学習していた子どもたちも、寝転んでいるからだらしくしているわけではなく、それぞれの子どもたちがそれぞれに自分のやるべきことに取り組んでいた。私たち見学者がいても我関せずで学習に集中している姿には、ある意味その冷静さに驚いた。



伸び伸びと学習に集中する子どもたち

見学後、案内してくださった Ms. Pirjo Levaniemi とのディスカッションの時間となった。殆ど彼女から話を聞くことの方が多かったが、私たちの質問にも分かり易く答えていただけて大変充実した時間であった。以下、その内容を列記する。

- ・「クッコ・プロジェクト」という制度を作り、教育省から補助を受け、学校生活の中で優れた行いや学びをした児童・生徒を表彰し指導に生かしている。
- ・学習支援コーチとして教員2名を置き、子どもがどう勉強していけばよいかをアドバイスし、学び方を指導している。
- ・教師たちは毎月テーマを持ってそれを授業の中に取り上げ、指導を行っている。例えば「自分を知る」というテーマを掲げたら、色々な授業の中でその課題に迫った指導を試みている。
- ・移民の子ども達が多く在籍しているので、その子ども達が学習に遅れないように、学習に躓く前に支援を行い理解を図っている。
- ・語学学習充実のプロジェクトを置き、スペイン語を新たに取り入れた。
- ・経済状況の悪化で、先生たちが無給休暇を取らされる状況がでてきた。
このようなことから、先生の数が減りクラスのサイズが大きく（1クラス当たりの生徒数が多い）なっていくことでの教育への問題が不安視されている。
- ・子ども達が抱える問題は、社会、家庭が多く反映しているので、子ども達だけの対応では済まないことが多い。
- ・保護者のタイプ、モラル、学校への評価といったことが変化してきている。
- ・いかに集中して子ども達に授業を受けさせるかを、先生方で話し合うことが多くなっている。
- ・国語の授業の中でも多様な指導法があり、一人ひとりの子どもの状況に対応するため、教師はそれぞれ独自の教材を用意している。
- ・授業で大切なことは、子ども達に自分の目標を掴ませるように指示をしっかりと、その上でサポートを行うことである。

- ・PISA の結果は今は良いが、今後いろいろな面が多様化してくると、教師がどれだけそれらへの対応に耐えていけるかが心配である。

以上、Ms. Pirjo Levaniemi 先生の教育に対する熱い思いが溢れた内容であった。先生はビシュテッシュ市の市議会議員も務められており、議会の中でも活躍されているようだが、教育に関しては「予算とマンパワーがほしい」ことを常に訴えていらっしゃるとのことだ。しかし、この国も世界的な不況に勝てず、教育面への予算は削られるばかりで苦しい様子だ。それでも、子供達の教育にとって何が大事であるかを訴え続けて頑張っていくしかないと話されていた。

これは東京の教育の中でも言えることで、人的資源を豊かにするためには、必ずや大きな予算が必要となる。昨今の経済状況の中、日本はまだ教員の無給休暇の指示がないにせよ減給状態が続き、現場からはその多忙さにも加えてため息が漏れている。一番に力を入れるべき教育への予算に、何よりも安定した確保が望まれるのは、どこも同じだ。

まとめ

この国の教育レベルの高さは、一朝一夕に生まれたものではなく、教員養成の充実と子ども一人ひとりのニーズに応じたきめ細やかな指導、そしてそのような中で確立されているインクルーシブ教育が大きな要因となっていることを改めて認識した。

東京都の教育も、教員の資質の向上に力を入れることと、少人数指導のシステム化、ならびに障がいの有無に関係なく全ての子どもが同じ教室で学びを共にする、インクルーシブ教育の構築が強く望まれるところである。

PISA での優秀な結果の要因を知ることが視察の第一目的であったが、教育の真のあり方や、国の進む方向性など、もっとスケールの大きい問題を掘むことができた。「百聞は一見に如かず」そのものの、大変に有意義な視察であった。この経験を東京の子どもたちの教育へと是非生かしていきたい。

(文責 岡田 眞理子)